「別れ」　　２０２６年１１月８日　　主日礼拝
使徒言行録　第２０章１７～３８節

今日の聖書の箇所には、パウロの告別説教が記されています。パウロにとっての最後の伝道旅行になった第３回伝道旅行もいよいよ終わりに近づいてきました。パウロは並々ならぬ決意を持って、エルサレムへと向かっていくのです。その時のパウロの状況はいったいどのようなものであったのか。２２節以下でパウロ自身がこう語っています。「そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけです。聖霊がどこの町でもはっきりと告げてくださっています。しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」。パウロは自分の命の危険さえ感じながら、もう二度と会うことのできないエフェソの長老たちとの別れを惜しみます。とても感動的な場面です。映画でいうなら、いよいよクライマックスに差し掛かろうという場面です。パウロがそうまでしてエルサレムへと上っていかなければならなかった理由はいったい何だったのか。パウロ自身の言葉を借りるならば、「“霊”に促されて」、すなわち、半ば強いられるようにしてのエルサレム行きでした。確かに聖霊によって導かれてエルサレムに上って行かざるを得なかったパウロでしたが、しかし、パウロ自身の中にもエルサレムに行かなければならない理由がありました。それは、パウロの使命に係わることでした。

優れた異邦人伝道者として働いていたパウロは､ヨーロッパの東南部で伝道旅行を行い、福音宣教の業をなしてきました。特に、ギリシア神話や哲学が浸透している地域における異邦人に対する働きは、めざましいものがありました。しかしパウロの頭の中には、常にユダヤ人に対する伝道の意識がありました。それはパウロ自身がユダヤ人であったことと、彼自身がキリスト教への改宗者だったことによります。パウロはかつて、神に対する熱心さのゆえにキリスト教を異端・偽物と考え、クリスチャンたちを迫害してきました。かつては自分自身がキリスト教の迫害者であったのに、イエス・キリストとの出会いを通して目覚めました。イエス・キリストが自分の信じている神なのだということを教えられたのです。そしてイエス・キリストとの出会いは、パウロ自身の信仰のあり方、生き方までも変えてしまいました。かつては神に対する熱心さのあまり、イエス・キリストを信じる者たちを迫害してきました。自分の信じるもの以外の人たちを迫害してきたのです。ところが、イエス・キリストと出会ってからパウロは、キリストを信じない人たちを迫害するどころか、自らの命の危険をも顧みずにキリストを宣べ伝える伝道者へと変えられていったのです。かつては自分に敵対する者を迫害してきたパウロが、イエス・キリストに出会ってから、自分の敵に対して命を投げ出してまでイエス・キリストを宣べ伝える者へと変えられていった。ですから、パウロにとっては異邦人伝道もさることながら、かつての自分のように神を信じながらイエス・キリストを信じない同胞のユダヤ人たちに対する伝道は命を懸けても果たさなければならない使命でした。２１節には、次のように記されています。「神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証ししてきたのです」。パウロは、異邦人であるギリシア人に対する伝道だけではなく、同胞であるユダヤ人にも熱心に伝道してきたと語るのです。

パウロにとってはそのように、自分の同胞であるユダヤ人の中に、キリストを信じる者とそうでない多くの者たちがいて敵対していることも悩みの種でしたが、それ以上にパウロの頭を悩ませていたのが、同じキリストを信じる者たちの間でのトラブルでした。この当時、キリスト教には２つの流れがありました。一つはユダヤ教の流れを強く引くエルサレム教会のようなあり方です。彼らはもっぱらユダヤ人にイエス・キリストを宣べ伝えることを行っていました。ですからエルサレムというイスラエルの中心で活動を行っていましたが、ユダヤ人に福音を宣べ伝えるためにはどうしても昔からのユダヤ人の習慣を尊重しなければなりませんでした。旧約時代からの律法や伝統を重んじ、したがって、異邦人への伝道はおろか、異邦人と交わることすらためらってきました。イエス・キリストの直弟子であったあのペトロでさえ、ガラテヤの信徒への手紙２章に記されているように、異邦人と一緒に食事をしているところをエルサレム教会から来た人たちに見つからないようにしようとして、パウロから面と向かって非難されたほどです。このように、ユダヤ教的な旧約聖書の時代からの伝統や律法を重んじるエルサレム教会にとっては、同じキリスト教でありながら異邦人伝道を熱心に行っている教会を容易に受け入れることができませんでした。パウロの悩みはここにありました。ユダヤ人に対してもギリシア人に対しても、もっともっと福音を宣べ伝えていかなければならないのに、働きはたくさんあるのに、同じユダヤ人からはイエス・キリストを信じているキリスト教だからと迫害され、命を狙われる。ところが、肝心のキリスト教の教会ですら、律法と伝統とを重んじるエルサレム教会が、同じイエス・キリストを信じる同胞に対して、異邦人伝道は好ましくない、異邦人と一緒に食事をしたり交わりをしてはならないと言ってくる。キリスト教の信仰を外に向かって伝道していかなければならないのに、内部で仲たがいをしている。パウロはそれを見過ごしにするのが絶えられなかった。何とか、エルサレム教会と異邦人伝道を行っている教会との間に立って仲直りをさせ、手を取り合って、協力しあって、外に向かってイエス・キリストを宣べ伝える働きをなしていこうではないか。そのために、パウロはエルサレムへと向かっていこうとしていました。けれども、エルサレムはそんなパウロにとってたいへん危険なところでした。かつてあれほど熱心にクリスチャンを迫害していたパウロが、寝返ってイエス・キリストを宣べ伝える伝道者になってしまった。キリスト教を信じない人たちにとっては、パウロは憎き相手でした。一方、キリストを宣べ伝えているエルサレム教会にとっても、異邦人伝道者として名前を馳せていたパウロはおもしろくない人物でした。どちらにしても敵ばかり。そんな状況が待ち受けるエルサレムへとパウロは向かいました。そこにはパウロが取り除かなければならないと考えていた二重の隔ての中垣が存在していたのです。一つは同じキリスト教同志の隔ての中垣でした。イエス・キリストを信じる同じ信仰を持ちながら、律法と伝統を重んじることから異邦人との交わりを避ける教会と、異邦人伝道をする教会とが仲たがいをする。しかしそれは、信仰の根幹に係わることでした。キリストの愛を語り伝える教会が、互いの違いを認めることもできずに、自分と同じ考えを持たないものを切り捨ててしまう。語り伝えようとする愛を実践することのできない教会の姿がそこにある。パウロはエルサレム教会の狭さを、自分の弱さとして受け入れようとしました。相手の非を責めて切り捨てるのではなく、自分の命を差し出してまでもイエス・キリストの愛を語り、それを実践した。パウロにとってエルサレムに上っていくことは、イエス・キリストの愛の福音を実践することに他ならなかったのです。

そしてパウロはもう一つの隔ての中垣、同じユダヤ人であり同じ神を信じながら、イエスをキリスト・神の子と認めない多くのユダヤ人たちがいる。彼らに対しても、かつてパウロがクリスチャンを迫害したのと同じように相手を切り捨てるのではなく、彼らの弱さを自分自身の弱さと知り、その弱さのためにこそイエス・キリストは十字架に架かられ贖いとなってくださったのだと、そのことを知ること、そのことを宣べ伝えるために、パウロはエルサレムへと上っていくのです。

隔ての中垣。私たち人間は、自分の居場所を作るために、他の人との間に隔ての中垣を作ろうとします。自分はこちら側の人間。そして気に入った人がいると、あなたはこちら側。気に入らない人がいれば、あなたはあちら側。そうやって相手を切り捨て、排除しようとする。そんなふうにしてしか、自分の居場所を作ることができない弱い者なのです。人間の営みは、このようにして隔ての中垣を作り、私はこっち、あなたは私の役に立つからこっち、あなたは気に入らないからあっち、というように、自分の側のグループとそうでないグループとに分けて、相手を排除したり攻撃したりして自分の立場を確立しようとするのです。そうやって、どこにも入ることのできなかった弱い人たち、貧しい人たちは、社会そのものから排除されていく。しかし、イエス・キリストはそのようにして排除され、切り捨てられていく側にいつもいてくださいます。そして、イエス・キリストは反対側にいる人間を決して切り捨てようとはされません。高みにいる人間が低みに押しやられた人間を切り捨てようとして、低みに降られたイエス・キリストをも一緒に切り捨てようとしても、イエス様御自身は低みの中から、反対に高みにある人間を切り捨てようとはされず、かえって彼らに低みに立ち直すようにと教えられるのです。

パウロは、自分が宣べ伝えてきたイエス・キリストの教えを実践しようとします。かつてクリスチャンを迫害したときのように相手を排除し切り捨てるのではなく、むしろ相手を得るために、イエス・キリストに従って低みへと降っていきます。それがエルサレムへと向かう旅でした。パウロは語ります。３２節。「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです」。そして３５節。「あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました」。

イエス様御自身が隔ての中垣を取り除くために、自ら低みに降られたように、パウロもまた、隔ての中垣を取り除くために、低みへと降っていきます。それがパウロにとってのエルサレム行きでした。

私たちは隔ての中垣を作り、人を自分の側がそうでないのかに分け、相手を切り捨てていくのでしょうか。それとも、私たちもイエス様がなされたように、隔ての中垣を取り除くために、低みへと降って行くのでしょうか。多くの人が隔ての中垣によって人と人とを区別しようとする時代にあって、今こそ、私たちがイエス・キリストに従うのかそうでないのかが問われているのです。

お祈りしましょう。